

## 日本人学校児童(フランス)の適応構造

渡辺俊三<sup>(1)</sup> 豊嶋 秋彦<sup>(2)</sup> 大場昭一<sup>(3)</sup> 飯塚 稔<sup>(3)</sup> 植本雅治<sup>(4)</sup> 森山成彬<sup>(5)</sup>  
小泉 明<sup>(1)</sup> 一之瀬正興<sup>(6)</sup> 寺田光徳<sup>(6)</sup> DOMINIQUE RICHARDOT<sup>(7)</sup>  
大西 守<sup>(8)</sup> 浜田秀伯<sup>(9)</sup> 藤谷興一<sup>(10)</sup>

**抄録** フランス P 市の日本人小・中学校児童の外国文化への適応について検討を加えた。対象は日本人学校児童122名(男71, 女51)であった。今回のアンケート調査は32項目よりなり、外国文化への適応の評価と印象、外国語能力の自己評価、日本とフランスの関係についての評価などよりなる。このアンケートを統計数理学的方法で検討を加えた。結果は、外国文化への適応の評価は概ね比較的良好であった。さらに、適応への重要な因子として、外国語の能力があげられ、外国語学習への積極的態度が観察された。

弘前医学 36: 167-175, 1984

**KEY WORDS** : adjustment culture  
school statistics  
Japanese

### A STUDY ON THE ADJUSTMENT OF PUPILS IN JAPANESE ELEMENTARY AND JUNIOR HIGH SCHOOL IN PARIS

SHUNZO WATANABE<sup>(1)</sup>, AKIHIKO TOYOSHIMA<sup>(2)</sup>, SHOICHI OBA<sup>(3)</sup>, MINORU IIZUKA<sup>(3)</sup>,  
MASAHARU UEMOTO<sup>(4)</sup>, NARIAKIRA MORIYAMA<sup>(5)</sup>, AKIRA KOIZUMI<sup>(1)</sup>, MASAOKI  
ICHINOSE<sup>(6)</sup>, MITSUNORI TERADA<sup>(6)</sup>, DOMINIQUE RICHARDOT<sup>(7)</sup>, MAMORU ONISHI<sup>(8)</sup>,  
HIDEMICHI HAMADA<sup>(9)</sup> and KOICHI FUJIYA<sup>(10)</sup>

**Abstract** A study on adjustment to foreign culture of pupils in the Japanese elementary and junior high schools in Paris was attempted. The subjects consisted of 122 pupils (71 boys and 51 girls). Duration of their stay in France was less than 1 year in 34, 2-3 years in 45, 4-5 years in 25, 6-8 years in 11 and 11~14 years in 7. This study was performed, using questionnaire, which was composed of 32 items, referring to self-estimation on adjustment to foreign culture and on capability of foreign language and opinion on relationship between Japan and France.

Replies were analysed statistically. The results revealed, self-estimation of adjustment to foreign culture was relatively high. It was pointed out that one of the most important factors in adjustment to foreign culture was capability and active attitude to learn foreign language.

Hirosaki Med. J. 36: 167-175, 1984

<sup>(1)</sup> 弘前大学医学部神経精神科  
(主任 佐藤時治郎教授)

<sup>(2)</sup> 弘前大学保健管理センター  
(主任 松井哲郎教授)

<sup>(3)</sup> パリ日本人学校  
(代表 大場昭一校長)

<sup>(4)</sup> 神戸大学医学部精神神経科  
(主任 中井久夫教授)

<sup>(5)</sup> 九州大学医学部神経精神科  
(主任 中尾弘之教授)

<sup>(6)</sup> 弘前大学人文学部フランス文学

<sup>(7)</sup> 弘前大学教養部仏語

<sup>(8)</sup> 東京慈恵会医科大学精神神経科  
(主任 森 温理教授)

<sup>(9)</sup> 慶応義塾大学医学部精神神経科  
(主任 保崎秀夫教授)

<sup>(10)</sup> 東京医科歯科大学医学部神経精神科  
(主任 高橋 良教授)

昭和58年12月22日受付

<sup>(1)</sup> Dept. of Neuropsych. Hirosaki Univ. Schl. of Med. (Director: Prof. T. SATO), <sup>(2)</sup> Health Administration Center, Hirosaki Univ. (Director: Prof. T. MATSUI), <sup>(3)</sup> Institut culturel franco-japonais à Paris (Director: S. OBA), <sup>(4)</sup> Dept. of Psychoneurol., Kobe Univ. Schl. of Med. (Director: Prof. H. NAKAI), <sup>(5)</sup> Dept. of Neuropsych., Kyushu Univ. Schl. of Med. (Director: Prof. H. NAKAO), <sup>(6)</sup> Section of French Lit., Hirosaki Univ. Faculty of Humanities, <sup>(7)</sup> French Language, Liberal Arts, Hirosaki Univ., <sup>(8)</sup> Dept. of Neurol. and Psych., Jikei Univ. Schl. of Med. (Director: Prof. O. MORI), <sup>(9)</sup> Dept. of Psychoneurol., Keio Univ. Schl. of Med. (Director: Prof. H. HOZAKI), <sup>(10)</sup> Dept. Neuropsych., Tokyo Med. and Dent. Univ. (Director: Prof. R. TAKAHASHI)

Received for publication, Dec. 22, 1983

I. はじめに

日本と海外との国際交流はめざましいものがあり、海外在住の日本人は相当数にのぼり、しかも家族同伴の在住者が多く、海外在住の学齢期の児童は2万7千人にも達し、そのために日本人学校67校、補習授業校78校が各国に設置されている<sup>1)</sup>。

これら在外子女、帰国子女の異文化への接触、適応、再適応の問題は、「文化接触」、「文化摩擦」、<sup>1~6)</sup>「異文化間研究」など大きな関心を集めている。それ故、海外在住日本人子女における全般的な生活適応の状況・構造を眺望するのは意義があると思われ、また個々の事例の特徴はその母集団のもつ特性との比較においてはじめてその意味が明らかになる<sup>7)</sup>。

今回、フランスP市日本人学校に学ぶ児童(小学5年から中学2年)を対象に、第1にフランスの異文化環境をどのように意識・評価しているか、第2にそれらの諸評価が全体的な適応にどのように関連しているか調査・分析したので報告する。

II. 方 法

昭和55年秋、フランスP市日本人学校児童を対象(表1)に質問紙(表2の29項目と表3の3項目)を用いて調査した。質問紙は5段階評定項目として、①異文化環境(生活環境および人的側面)の諸側面への評価と全体的印象、②フランスへの適応の基本的段階で

ある言語能力に関する自己評価、③日仏関係の評価と予想、④海外経験を問う29項目と、自由記述項目として、⑤日仏関係への提言(表3)など3項目、計32項目からなる。

5段階評定項目への反応は、好ましい方向の評価ほど高得点を与え、1~5点を割当て、自由記述項目(表3)への反応は現象的に数種に分類した。

分析の段階では4つの基準変数を設定した。すなわち生活環境への総合的評価としての④「フランスが好き」、直・間接的被害的体験としての⑤「外国人をバカにする」、また一般に適応状況を規定すると考えられる⑥学年および⑦滞在期間である。

Ⅲの結果と考察(1)では単純集計によって対象者における適応の全体的状況をとらえ、Ⅳの結果と考察(2)では4つの基準変数との関係と、①~④の諸項目での反応との、⑧単相関係数、⑨偏相関係数、⑩ $\chi^2$ 検定による度数分布比較、⑪t検定(両側)(ただしFが $p < 0.05$ ではコ克蘭・コックス法)による平均値を比較し、適応構造を探り、⑫因子分析(セントロイド法・バリマックス回転)によって適応の因子を抽出した。

III. 結果と考察(1)—— 仏国における適応状況

ここではフランスでの異文化環境の評価、適応手段と意欲、日仏関係の評価の三側面から適応の状況をさぐる。5段階評定項目の結果は表2に示した。平均値3.5以上を好意的

表1 対 象 者

学 年	男		女		計	滞在年数*	人 数	%
	人 数	%	人 数	%				
小学5年	22		20		42	1年	34	(27.9)
小学6年	20		10		30	2-3年	45	(36.9)
中学1年	23		12		25	4-5年	25	(20.5)
中学2年	6		9		15	6-8年	11	(9.0)
計	71	(58.2)	51	(41.8)	122	11-14年	7	(5.7)

( ) : 全対象者への%

\* : 9-8年はなし

評価、逆に 2.5 以下を非好意的評価とした(表 2 の平均)。

### 1. 異文化環境の評価

生活環境に関しては、「食物、交通、建物、文化」に好意的で、「道路、物価、治安」に非好意的となっており、街並、メトロ、バス、料理、いわゆるフランス文化などは好ましく映り、経済停滞の反映として物価、家賃の高騰、犬の糞が目立つ道路の景観に批判的なのであろう。

フランス人の属性評価については、「物を大切にする、礼儀正しい」が好意的で、古い建物、街並、調度家具の保存など、日本人との対比が浮彫りにされている。「働かない、頑固、規則を守らぬ、外国人をバカにする、ケチ」といった属性に非好意的であり、フランス人の自己主張の強さ、頑固、バカにされる印象があるものの、日本人には欠ける公衆場面での礼儀正しさを評価している。働きに関しては保護者(商社、金融、運輸関係の子弟が多い)の職業生活で得た評価が多分に反映しているのであろう。

以上のごとく生活環境、フランス人の属性に対する評価では、好意的、非好意的の両極化がみられるものの、全体的印象では「フランスが好き」が 3.731 と好意的評価を示し、かなり適応的といえる。

### 2. フランスに対する適応の手段と意欲

適応手段としての言語(フランス語)に関しては、現在の能力には中間的自己評価だが、今後の構えとしてはきわめて積極的に「覚えたい」としており、現在の能力の不十分さを自覚し、積極的な適応意欲を示しているといえる。

### 3. 日仏関係への評価と予想(表 2, 3)

海外在住者にとって国家間の友好関係は、自らの適応に大きく関与するものと思われる。日仏関係については現在より将来に対して楽観的な予想がなされている( $t=3.38$ ,  $p<0.001$ )。IVでみられるように現在、将来の評価とも基準変数「フランスが好き」との

間に有意の正の相関がみられ、フランスの生活を享受できることがこれらの評価を好意的方向におし上げているといえよう。それにしても現在の評価が低いのは、経済摩擦など国家間の問題が対象者の意識にも陰をおとし、将来への予想には関係改善の願望が投影されていよう。

両国相互の相手国研究の程度については、フランス側のそれよりも日本側のそれにより否定的評価を与えており( $t=6.00$ ,  $p<0.001$ )、日本側の対応に不十分さを感じているといえる。

自由記述項目への解答は表 3のごとくで、いずれも無答が第 1 位だが、日仏友好関係のために日本がとるべき方法としては、「対話」と「政治・経済的方策」が多いのに対し、フランスには「日本の理解」を求めるものが多い。このうち前二者はフランスより日本に強く求めており、経済摩擦下の状況を日本側からの働きかけや政策変更によって打開してほしいという展望が読みとれる。

## IV. 結果と考察(2)——適応の構造(表 2)

ここでは 4 つの基準変数 A, B, C, D と他の評定項目への反応とクロス分析<sup>注 1</sup>から、対象者のフランスにおける適応の構造を探る。

### 1. 全体的適応<sup>注 2</sup>の構造 —— A「フランスが好き」を中心に

対象者に対するフランスの全体的適応の指標である「フランスが好き」を基準変数にす

注 1: 五段階評定項目と四基準変数 A④B④C④D との単相関および 2 基準変数との偏相関を求め、さらに  $x^2$  検定による度数分布比較および  $t$  検定による平均値比較では、表 2 の注のごとく A④B④の I・II・III は、A④B④に対する非好意的、中間的、好意的評価群とし、C④は小学 5 年、6 年、中学 1 年、2 年の 4 群に分け、D④の I・II は滞在年数 3 年以下、4 年以上とした。

注 2: 人が環境をどう評価するかは、環境が人に対して adjust しているか否か(環境の人格適応)の指標であるから、全体的評価は全体的な人格適応を反映する<sup>8-10)</sup>。

表2 各五段階評定項目の人数, 平均値, 標準偏差および各五段階評定項目と四基準変数との単相関, 偏相関,  $x^2$ , t 検定

	人数	平均	標準偏差	④ フランスが好き									⑤ 外国人をバカにする								
				単相関	偏相関			$x^2$ df=4	t			単相関	偏相関			$x^2$ df=4	t				
					㊦一定	㊧一定	㊨一定		I<II	I<III	II<III		㊦一定	㊧一定	㊨一定		I<II	I<III	II<III		
①異文化環境の評価	1 くらし	118	2.805	1.056	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+				
	2 建物	119	3.697	1.062	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+				
	3 交通	117	3.778	1.175		+		+	+												
	4 食物	120	3.875	0.975	+	+	+	+	+		+	+	+								
	5 文化	114	3.465	0.988	+	+	+	+	+	+	+	+	+								
	6 物価	111	2.117	1.181	+	+	+	+	+		+	+	+	+			+				
	7 治安	119	2.571	0.917							+	+	+								
	8 道路のヨミ	120	1.750	0.919							+	+	+								
	9 「花の都パリ」	119	2.975	1.298	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		
	10 ケチ	109	2.450	0.897		+		+			+	+	+				+	+			
	11 頑固	114	1.939	0.855																	
	12 親切	119	3.261	1.037	+	+	+	+	+		+	+	+								
	13 礼儀正しい	115	3.548	1.053													+				
	14 規則を守る	117	2.171	0.940								+	+	+	+	+			+		
	15 よく働く	116	1.586	0.895				+				+	+	+	+	+	+		+		
	16 物を大切に	117	4.085	1.119								+	+	+	+	+	+		+		
	17 わがまま	101	2.673	0.862	+	+	+	+	+		+	+	+	+	+	+	+				
	18 外国人をバカにする	113	2.177	1.071																	
	19 フランス人に学ぶ	118	3.246	0.905	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		
20 フランスを好き	119	3.731	1.118																		
②適応手段と意欲	21 フランス語を話せる	120	3.058	0.919	+	+	+	+	+		+	+									
	22 フランス語を覚えたい	113	4.150	1.096	+	+	+	+	+		+	+									
③日仏関係	23 仲よし(現在)	103	2.816	0.668	+	+	+	+					+	+	+	+		+			
	24 仲よし(将来の予想)	101	3.198	0.917	+	+	+	+					+	+	+	+		+			
	25 日本側の仏研究	104	2.625	0.947																	
	26 仏側の日本研究	108	3.435	1.007																	
④海外経験	27 外国人の友人数	121	2.736	1.419																	
	28 暮らした国の数	119	1.588	0.828																	
	29 行った国の数	122	3.885	1.325																	



表3 自由記述項目のカテゴリー分類

	1 日本のと るべき方法	2 フランスの とるべき方法	3 自分がな すべきこと
政治経済的方策 の理解	23.8 %	15.6	2.5
相手国の理解	18.0	21.3	34.4
対話をかえる注	6.6	3.3	13.1
日本人(フランス人)の態度をかえる注	29.5	16.4	13.1
その他	19.7	16.4	17.2
無回答	0.8	1.6	0.8
	34.4	47.5	49.2
計	100	100	100

注：1, 3では日本人  
2ではフランス人

ると、単相関係数では生活環境への評価として「くらし、建物、食物、文化、物価」、フランスへの全体的印象である「花の都パリ」、フランス人属性評価として「親切、わがまま、フランス人に学ぶ」といった項目に、さらにフランス語に関する2項目(21, 22)、日仏関係の2つの評価(23, 24)でも正の相関関係が見出される。これら計13項目については3種類の偏相関係数のすべてでも正の相関がみられるが、 $\chi^2$ , t検定でみれば、日仏関係の評価は基準変数による3群間に有意な関連は見出されていない。

逆に単相関係数で無相関でも、偏相関係数や $\chi^2$ , t検定によって有意な関連の示唆される項目は、「交通、ケチ、よく働く」の3項目であるが、関連が弱い。

以上のごとく、全体的適応の構造はつぎのように小括されよう。すなわちフランスの全体的適応(好き、嫌い)は、おもに生活環境との適応関係や対人関係において、フランス人が親切であったか、わがままでなかったかの体験的印象、さらにフランス語、フランス人に対する積極的な適応意欲などとの間で相互規定的関係をもつ。しかしフランス人の属性認知の多くと海外体験の広狭は、全体的適応とは関連が弱いか無関係であり、日仏関係を巡る評価は部分的にのみ関連をもつことになる。

## 2. 不適応の構造——㊸「外国人をバカに

する」を中心に

ここではフランス人の言動を因とする不適応的体験の指標「外国人をバカにする」への反応を基準変数とすることによって、特定の不適応に焦点をあててその構造を吟味したい。

表2より基準変数㊸と有意な正の単相関係数を得た項目は7項目、偏相関係数をみると10項目、 $\chi^2$ , t検定では8項目で関連が見出された。しかしⅣの1でみられるような関係ではなく部分的なものである。

以上から、フランス人の言動による不適応の構造はつぎのようになる。 「規則を守らない、働かない、わがまま、ケチ」といったフランス人の属性への非好意的評価や、「くらし、物価」などの生活感覚、現時点での日仏関係への否定的評価が、不適応的体験との間に相互規定関係をもつ反面、フランス語やフランス人に対する適応意欲、海外体験の広狭、生活環境の多くの側面に関しては、不適応体験との関連は弱いかあるいは無いといえよう。

「外国人をバカにする」の体験のある者は、「規則を守らぬ、働かない」といった全体的適応との関連が弱い属性にかなり敏感になっていることが特徴であり、また「道路のゴミ」のような、他のすべての基準変数とは無関連な、いわば周辺的な事象に目を向けることも特徴である。

不適応的体験がただちに異文化環境全体やその中核的部分への攻撃に結びつくのではなく、むしろ周辺的な特性に攻撃感情を向けやすいことを意味するのかもしれない。

なお、基準変数④「フランスが好き」の間には有意な関連が見出されていない。これは④はかなり広範囲にわたる適応・不適応の一般的指標と解されるのに対し、基準変数⑩「外国人をバカにする」は、単極的な不適応の指標であることが一因であり、一側面からのみ不適応をみているのであろう。

### 3. 年齢と適応構造——⑩「学年」

年齢と適応との関係を見ると、有意な単相関係数のみられるのは、生活環境の評価では「交通、文化（負の相関）、物価（負）」、フランス人の属性評価では「ケチ、よく働く（負）、外国人をバカにする」、日仏関係では「日本側のフランス研究（負）」の計7項目になる。

偏相関係数で見ると、滞在年数を一定にすると上の7項目の他に、「フランス語を話せる、外国人の友人数」の2項目が負の相関を示し、 $\chi^2$ 、t検定をみると、「礼儀正しい、仲良し（現在）」の2項目も加え、計11項目が年齢と強い関連があるといえる。基準変数④とは相関はないが、⑩とは正の相関を示している。

以上、小括すると年齢差は異文化環境の特定領域・側面との間の適応状況を規定するが、全体的適応を大きく左右するものではないといえる。さらに特徴的なことは相関する項目の過半数が負の相関を示し、他の基準変数④⑩と異なる点である。すなわち年齢が増すにしたがい、異文化環境の諸側面、自分の適応の仕方などに批判的な目をむけ、フランス文化をよりさめた目でながめ、物価の高さを認識し、フランス人はさほど礼儀正しいわけでもなく、またそれほど働かないわけでもないと考え、その一方で自分のフランス語能力に不満を感じ、外国人の友人の維持、獲得がむずかしくなり、日本側のフランス研

究の不十分さにも目をむけてくるという像がえられる。

### 4. 滞在年数と適応構造——①「滞在年数」

滞在年数と適応の関係を概観したい。単相関係数では「くらし、治安、フランスが好き、フランス語を話せる、外国人の友人数」の5項目で、偏相関係数でも基本的に同様の結果をえた。基準変数④とは相関があるが、⑩とは相関がみられない。

滞在年数の多少（3年以下、4年以上）の平均値の差では、「物価、治安、ケチ、親切、フランス語を話せる、外国人の友人数、行った国の数」の7項目である。これらのうち滞在年数と最も強い関連を示すのは、「フランス語を話せる」で相関係数が.55～.62である。しかし「フランスが好き」との間では単相関係数が有意ではあるものの、年齢差の影響による見かけの相関関係と解される。

以上を小括すると、滞在年数が増えると言語能力、交友の広さ、フランス以外の海外経験が増・拡大し、暮らしやすさの感覚がおし上げられるほか、生活環境とフランス人の属性のうち、限られた側面に対する評価がより好意的方向に傾くが、全体的適応や不適応体験には大きな影響はない。

### 5. 適応の因子構造（表4）

ここでは因子分析によって適応の因子構造をさぐる。

5段階評定項目のうち、フランスとの間の適応関係に直接関連しない表2の「暮らした国の数」、「行った国の数」を除いた27項目によって因子分析を行うと、累積奇与率が41.2%になる6つの共通因子を得る。因子負荷量.300以上を有意と考え、各因子はつぎのように解釈された。

Iは生活環境のうちの社会的用具やフランス全体への好意的評価と積極的適応意欲に注目し、「フランスへの好意的・積極的構え」の因子、IIはフランス人への否定的評価や暮らしにくさの感覚を中心とする「対人的、経

表4 因子分析の結果

				I	II	III	IV	V	VI	h <sup>2</sup>	
異文化環境	生活環境	1	く 建 物	ら し	0.204	<b>-0.364</b>	<b>-0.313</b>	-0.126	-0.184	0.290	0.406
		2	建 物	物 通	<b>0.652</b>	-0.188	-0.129	0.194	-0.018	0.052	0.517
		3	交 通	物 通	<b>0.508</b>	0.010	-0.102	-0.144	0.065	0.255	0.359
		4	食 文	物 通	<b>0.552</b>	-0.215	-0.163	-0.028	-0.214	-0.016	0.424
		5	文 物	物 通	0.088	-0.503	-0.068	0.146	-0.150	0.037	0.311
		6	物 治	物 通	0.212	<b>-0.334</b>	-0.166	0.081	-0.174	<b>0.362</b>	0.352
		7	物 治	物 通	-0.080	-0.265	0.129	0.244	<b>-0.321</b>	-0.163	0.282
		8	道 路	の ゴ	0.112	-0.095	<b>-0.610</b>	-0.065	0.076	0.014	0.403
		9	「花の都パリ」	の ゴ	<b>0.364</b>	-0.104	<b>-0.578</b>	0.018	-0.280	-0.197	0.595
異文化環境の評価	人的側面	10	ケ	チ	<b>0.330</b>	0.174	-0.202	<b>0.572</b>	-0.222	0.107	0.567
		11	頑	固	-0.076	0.047	-0.049	<b>0.560</b>	0.070	0.014	0.329
		12	親	切	0.224	<b>-0.390</b>	-0.201	-0.029	<b>-0.313</b>	-0.131	0.359
		13	礼 儀	正 し	0.121	<b>-0.356</b>	-0.209	<b>-0.332</b>	-0.180	0.045	0.330
		14	規 則	守 る	-0.011	-0.077	<b>-0.572</b>	<b>0.354</b>	0.023	-0.069	0.464
		15	よ 働	く る	0.014	<b>-0.473</b>	<b>-0.402</b>	0.252	-0.110	0.004	0.461
		16	物 を	大 切	0.111	<b>-0.472</b>	-0.027	-0.071	0.052	-0.046	0.246
		17	わ が	ま	0.199	-0.178	-0.073	<b>0.586</b>	-0.247	-0.054	0.484
		18	外国	人 を	0.281	-0.129	<b>-0.526</b>	0.079	0.096	-0.110	0.399
		19	フランス	人 に	0.175	<b>-0.507</b>	-0.115	-0.107	0.094	-0.196	0.360
適応手段と意欲	20	フランス	を 好	<b>0.512</b>	<b>-0.487</b>	-0.017	0.039	<b>-0.332</b>	-0.065	0.615	
	21	フランス	語 を	-0.104	-0.195	-0.060	0.001	<b>-0.674</b>	0.277	0.584	
日仏関係	22	フランス	語 を	<b>0.598</b>	-0.238	-0.028	0.071	0.106	0.065	0.435	
	23	仲 良 し	(現 在)	0.262	-0.177	-0.091	<b>0.385</b>	-0.032	<b>-0.595</b>	0.611	
	24	仲 良 し	(将 来の	<b>0.500</b>	-0.194	-0.229	0.108	-0.117	-0.296	0.453	
	25	日 本	の 仏 研	0.109	0.106	0.117	0.105	-0.058	<b>0.436</b>	0.241	
海外経験	26	日 本	の 日 本 研	<b>0.310</b>	0.036	-0.145	0.007	-0.006	-0.249	0.180	
	27	外国	人 の 友 人 数	0.091	0.046	0.065	0.057	-0.584	-0.004	0.359	
		SS		2.641	2.154	1.922	1.654	1.538	1.219	11.127	
		SS/N		0.098	0.080	0.071	0.061	0.057	0.045	0.412	
	SS/EC		0.240	0.196	0.175	0.150	0.140	0.111	1.010		

濟的生活への非好意的構え」の因子、Ⅲは「不快な体験」の因子、Ⅳはわがまま、ケチ、頑固、規則破りといったフランス人の「自己主張的国民性への好意的構え」の因子、Ⅴは「フランスに対する不適応」の因子、Ⅵは解釈困難であるが、日本側の努力にもかかわらず両国関係がうまくいかないといった内容の因子であろう。

基準変数④「フランスが好き」に高い負荷をもつ因子がⅠとⅡの2つになり二重構造を示し、「フランスが好き(嫌い)」とする者に2つの現象類型が存在するものと示唆された。それに対し基準変数⑤「外国人をバカにする」と関連が見出された因子はⅢで、高い負荷量を与えており単構造をなし、重要な現象類型としてはひとつとなる可能性があ

る。

なお、基準変数③⑥の2項目を説明する因子が第1~3順位という高い奇与率をもつ事実は、それら基準変数として設定したことの妥当性を示すであろう。

われわれは在日日本人の適応について検討したが、成人に関しては階層別の検討で、語学能力、経済的基盤、志向、資質、帰国後の受け入れ状況などが重要と考えられた。

邦人精神障害者については、<sup>11)</sup>旅行者群で前病歴を有するものが少なくなく、一時滞在者群では社会的、経済的な不安定要素を有し、当地での適応上の葛藤や将来への不安など発症に関与していた。定住者群では一定の傾向が得られなかった。

本報告の在仏日本人学校児童では、親の保護のもとに滞在しており、日本人学校へ通学しているため、経済的、語学上の問題は比較的少なく、全体的適応は良好であるが、その構造をさぐると異文化環境の生活環境、人的側面、適応手段と意欲、日仏関係が複雑に関与していることがわかる。

## V. ま と め

フランスP市日本人学校児童を対象として、在仏児童の適応の状況と構造が異文化環境の対象者に対する適応という視点に立ち、異文化環境への評価を手がかりとして検討された。

1. 単純集計により対象者全体の適応状況に関し、生活環境、フランス人の属性、フランスに対する適応の手段と意欲、日仏関係への評価と予想に分けて検討した。

2. 4つの基準変数、「フランスが好き」、「外国人をバカにする」、「学年」、「滞在年数」と他の評定項目へのクロス分析から適応の構造を探り、因子分析により解釈可能な5つの因子を得た。

パリ日本人学校職員（昭和55年度）のみなさまに感謝いたします。小林哲也教授（京都大学教育学部）、中西晃助教授（東京学芸大学海外子女教育センター）、佐藤国雄室長（文部省ユネスコ国際部国際教育文化課海外教育子女教育室）に御助言いただいたことに深謝します。御指導、御校閲いただいた佐藤時治郎教授（弘前大学医学部神経精神科）に感謝します。

なお、この論文の一部は「国際理解教育研究所主催国際理解教育奨励賞」論文募集に応募し佳作入選作品となった。

## 文 献

1) 小林哲也：海外子女教育，帰国子女教育・国際

化時代の教育問題。有斐閣，東京，1979。

- 2) 木庭修一（代）：海外子女教育を考える一帰国子女教育をめぐる一。東京学芸大学海外子女教育センター，1979。
- 3) 小林哲也（代）：在外帰国子女の適応教育の条件に関する総合的研究。京都大学教育学部比較教育学研究室，1977。
- 4) 小林哲也（代）：教育における文化的同化と多様化—マルティ・カルチュラル・エデュケーションの研究。京都大学教育学部比較教育学研究，1981。
- 5) 佐藤弘毅：海外子女の教育問題。学苑社，東京，1978。
- 6) 垂木祐三（代）：帰国子女の進路実態調査報告書。文部省初等中等教育局中学校教育課，1979。
- 7) 昭和55年度・学校要覧。パリ日本人学校，1980。
- 8) 北村晴朗：適応の心理。誠信書房，東京，1968。
- 9) 豊嶋秋彦，清 俊夫，芳野晴男：大学新入生における適応状況と適応過程—昭和52年度入学者に対する追跡的研究—。弘前大学保健管理概要，4：161-208，1979。
- 10) 豊嶋秋彦，清 俊夫，芳野晴男：大学新入生における適応状況と適応過程—入試制度改訂に伴う適応の変容と同化の諸相—。弘前大学保健管理概要，5：1-41，1981。
- 11) 植本雅治，森山成彬，大西 守，浜田秀伯，小泉 明，藤谷興一，渡辺俊三：パリ地区における邦人精神障害者—“病的旅”および放浪について—。精神医学，25：597-605，1983。
- 12) 渡辺俊三，小泉 明，森山成彬，植本雅治，稲村 博：在仏日本人の適応現象について—一階層別による検討—。弘前医学，36：158-166，1984。